

北朝鮮の山奥にある「強制収容所」をなくすため、多くの人びとに呼びかけています。

nf-staff@netlive.ne.jp

NO FENCE

<http://nofence.jp>

VOL. **29**

2014年5月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 【郵便振替口座】NO FENCE / 00180-1-707147

INDEX

【総会報告】

2013年度 活動報告・宋允復 2
2013年度 会計報告書 4
2014年度 活動方針 5
北朝鮮の人権活動は今からだ——NO FENCE 第6回定期総会にあたって・金尚憲	.. 6
北朝鮮の人権活動は今からだ！——金尚憲氏講演報告・小川晴久 16
Dear <i>No Fence</i> ・Markus Bell 19
新世話人からのごあいさつ・木村亮 22
【報道記事紹介】「国際社会と共に北朝鮮の包囲を」『東京新聞』 23
【報道記事紹介】「北、閉鎖収容所再開か」『東京新聞』 24

かつての兵士も、いまや囚人、魂は凍え、舌は黙している。
どこの詩人、どこの画家が この恐るべき捕囚の暮らしを描いてくれよう？

あの邪悪なカラスどもも知らなかった、どういう宣告をおれたちに下したかを。
おれたちをさいなみ、監獄から流刑へ、収容所へと追いやったとき。

だが奇跡は起こる！採石場の上に 自由の星が輝いている。
魂は凍えていても、砕けてはいない、舌は黙していても、いつの日か語り出すのだ！

(題名のない詩)

レオニート・シートコ、1949年

アン・アプルボーム (川上光訳)

『グラーグ ソ連集中収容所の歴史』

白水社、2006年、469頁。



NO FENCE 2013 年度 活動報告

事務局長 宋允復 

13年度は新たなチャレンジを行い、いささかなりとも成長したと思う。国連の普遍的定期的審査(UPR)に英文報告を提出し、COI に対し当会の蓄積の一端を提供し同報告書に反映させ、映画の字幕翻訳から焼き付け、上映までを当会内の一貫工程で実現した。いずれも当会世話人たちの発案、イニシアティブと献身によるものである。COI 報告によって収容所はじめ北朝鮮の人権の実情が広く世界に知らしめられるというモメンタムの創出に当会も役割を果たし得たことを確認しつつ、状況の進展を踏まえ、当会独自の貢献として何をなし得るか知恵を絞り、世話人ならびに当会会員のご支援とご期待、労苦に報いたいと考えている。

2014年4月12日 宋

活動日誌

- 2013.4.06 2012年度(第5回)総会 講演会：『金正恩を裁きに掛ける法：国連をどう動かすか』講師：権恩京さん 於：人権ライブラリー
- 4.27 13年度第1回(通算54回)世話人会、会報23号発行(この号以降李恩元さんが編集責任者)
- 5.11 第2回世話人会
- 5.26 並河真知子世話人主催、鹿児島で「北朝鮮脱出」「北朝鮮未だ存在する強制収容所」感想会
- 6.08 第3回世話人会
- 7.06 第4回世話人会。会報24号発送
- 8.03 第5回世話人会
- 7.31 山下誠さんの周旋でNHKプロデューサー、ディレクターと懇談 (小川、山下、宋)
- 8.04 九州北朝鮮人権集会 共催：NO FENCE、北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会、博多ブルーリボンの会 於：福岡市人権啓発センター(福岡の世話人 玉川裕二さんの企画運営で宋が参加)
- 8.04 午後6時から11時まで 鹿児島 鴨池公民館でお話 並河真知子世話人主催 参加者20人
- 8.05~07 並河世話人のお世話で宋が鹿児島並河農園に滞在し、関係者と懇談 (並河さんの働きかけでこの滞在の間に三名の方が新会員に)
- 8.30 国連調査委員会東京公聴会 於：国連大学(東京青山) 小川晴久、李相峰、宋が証言

- 9.11 UPRに対しNO FENCEよりレポート提出(李恩元さんをリーダーに7月から推進、砂川代表が英訳)
- 9.07 第6回世話人会
- 10.05 第7回世話人会
- 10.16~18 韓国ソウルの統一研究院、北韓人権データベースセンター訪問、収容所に関する知見交換(宋)
- 10.19 COI 公聴会報告(小川、宋)と講演『強制収容所、日本人妻の望郷の歌』李相峰 於：早稲田奉仕園 参加者 16名
- 11.03 第8回世話人会、会報第26号発送
- 12.06 『北朝鮮政治囚収容所に関する会見』(アムネスティ・インターナショナル日本主催 衆議院第二議員会館)で宋が収容所現況を概説
- 12.09 『2013北朝鮮人権国際会議』(ソウル プレスセンター)に招待され宋発表
- 12.14 ドキュメンタリー『CAMP 14 - TOTAL CONTROL ZONE』(邦題：『北朝鮮強制収容所に生まれて』)日本初の上映会 砂川代表コーディネートでトークライブ 於：人権ライブラリー 来場約 50人(字幕制作のためのソフト選定、翻訳、編集作業を細村嘉一さん、山下誠さん)
- 12.21 『張成沢処刑に関するNO FENCE 声明』公表(細村さん提案、小川副代表起草)
- 2014.1.13 第10回世話人会、会報27号発送
- 1.18 脱北者 金柱成さんヒアリング 於：星陵会館 参加者 25人
- 2.02 第11回世話人会
- 2014.2.16 講演『絵解き 北朝鮮の刑務所で私が経験したこと』於：専修大学(小沼堅二教授の便宜で)※講師がアクシデントで来日できず、小川晴久『2つの北朝鮮人権報告書』講義、高英起デイリーNK 東京支局長+宋のトーク、全参加者との質疑にプログラムを組み替えて実施。来場者約 50人。白血病闘病明けの荒井世話人来場。木村亮さん新世話人に。
- 2.18 ICNK 主催『国連の北朝鮮・人権調査委 最終報告書発表をうけて：今後と日本の役割』(参議院議員会館)にNO FENCEより小川、宋参加
- 3.01 細村さんが映画『北朝鮮強制収容所に生まれて』街頭宣伝活動。胸から映画のプラカードを下げ、赤羽から新宿まで徒歩で五時間、映画のチラシ入りティッシュを配布。
- 3.02 第12回世話人会、会報28号発送
- 3.03 ICNK 主催『より強い国連決議を求める院内集会』(衆議院第一議員会館) 宋参加
- 3.23 第13回世話人会

NO FENCE 2013年度 会計報告書

収入の部

前年度繰越金	1,303,491
会費	334,000
寄付	312,000
雑益	17,940
収 入 合 計	1,967,431

*1

支出の部

事務費合計		144,664
内 訳	事務用品費	9,652
	印刷費	5,760
	郵送費	89,590
	コピー費	3,490
	資料費 (申東赫映画 DVD)	36,172
交通費		44,330
会場費		34,550
講師謝礼		140,000
内 訳	4/6 K〇〇氏	40,000
	7/29 L〇〇氏	20,000
	8/30 L〇〇氏	20,000
	10/19 L〇〇氏	20,000
	1/18 K〇〇氏	40,000
招聘費	4/6 K〇〇氏	15,500
支 出 合 計		379,044

収支差額 (次年度へ繰り越し)

¥1,588,387

第六期会計 (2013.4.1~2014.3.31) について、上記記載に相違ございません。

2014年3月31日

会計監査 山崎 元江

*特記事項

*1 現金超過分を雑益として収入に組み入れています。

NO FENCE 2014年度 活動方針

去る2月17日北朝鮮人権状況調査委員会(COI)は9か月にわたる調査報告を全世界に公表した。主文(36頁)、詳細な事実認定(372頁)からなる膨大な内容で、北朝鮮政府・機関による人道犯罪が全てにわたって詳細に明らかにされ、ICC(国際刑事裁判所)に付託する道と国連総会決議で特別法廷を開催する二つの方法も明示された。今年の4月から北朝鮮に対する第2回目の普遍的定期的審査(UPR)も始まる。

NO FENCEは昨年、COI公聴会での証言とUPRに対する強制収容所に関する民間としての調査報告書の提出と、それぞれ貢献した。特に最近では北朝鮮の強制収容所の数と収容者数の推定に関して、「5か所、8~12万人」説が横行し始めたが、独自の調査で数も人数も実際はこれより多いことを主張してきた。

今回のCOI報告書では強制収容所問題は多くの侵害の一つとして取り上げられており、この問題の解決からと言う志向性は示されていない。張成沢とそのグループの粛清と今回のCOI報告による内情の指摘・告発で、北朝鮮の体制も長くは続かないという観測も生まれている。しかし北朝鮮の体制が崩壊する際には、収容所の収容者が皆殺しに会う危険があり、我々には体制の崩壊をただ待つという態度は許されない。収容者の救出のためにも収容所問題を先頭に立ててその廃絶を求めていくNO FENCE運動の存在意義は依然として存在する。この点に確信を持って、以下の方針を新年度に実践する。

- 一、 COI報告の活用と普及——その内容をよく把握し、学び、日本語訳にも努めて、ホームページに翻訳できたものから紹介し、日本国内への内容普及に貢献する。
- 二、 強制収容所の廃絶が何よりも必要であることを国内外に訴え、廃絶の方法についても提起し、広く国内外の意見をも集約して、課題実現に資する。
 - (1) 収容所体験者の手記を読み広げる運動を進める。
 - (2) 申東赫氏の記録映画の上映成功にも努力する。
 - (3) 学習会やシンポジウムも必要に応じて開催する。
- 三、 会報の発行を定期化(隔月)し、紙面に会員の声が反映できるよう努める。
- 四、 NO FENCEの主張と活動を海外に発信していくため、ホームページの英語サイトを主に活用する。そのための翻訳スタッフを確保する。
- 五、 NO FENCEの会員を増やす。賛助会員制度を活用して。
- 六、 役員 代表 砂川昌順、副代表 小川晴久、事務局長 宋允復、常任世話人 菅原民生(京都、木津川)、玉川裕二(福岡、佐賀)、並河真知子(鹿児島)、世話人 荒井正人(東京、世田谷)、石田英樹(川崎)、荻野さつき(札幌)、木村亮(東京、杉並)、細村嘉一(鎌倉)、山下誠(横浜)、李恩元(東京、北区)[任務分担は活動の中で具体化]

北朝鮮の人権活動は今からだ

—NO FENCE 第6回定期総会にあたって—

2014年4月12日 東京



北朝鮮の人権「第3の道」代表 金尚憲
世話人 李恩元訳



今日の第6回 NO FENCE 定期総会にあたりまして、私が尊敬する砂川代表と会員の皆様とともに北朝鮮の人権問題を考えるこの機会は、私個人的には真に光栄です。特に、この場で小川先生とお会いするのは私の大きな喜びでもあります。人権と国際正義の観点からして、韓国人でさえ、あまり興味のない北朝鮮の人々の人権と苦しみを、自分の問題として捉えていらっしゃる皆様に心から深く感謝と尊敬の気持ちをお伝えしたいと思います。

私は、今日のこの席が、礼儀を守る場ではなく、実際の問題解決に助けとなることを望む気持ちから、私が日ごろから思っていることを正直に話し、また、私の間違っているところについては皆さんから学んでいく場となることを願っています。そうした意味で、私の考え方が皆さんと違っていても一つの異見として、何卒ご了承くださいませようお願い申し上げます。

北朝鮮の人権問題の起源

皆さんもご存知のように海の上に見える冰山は、そのごく小さい部分に過ぎません。海の中の見えない大きな塊を見なければ、その冰山の実体を把握することはできないでしょう。同様に北朝鮮の人権問題も、今見えている部分だけを見ればそれを理解するにあたり限界が生じます。したがって、今日、表からは見えない北朝鮮の人権問題の起源と過程を、皆さんと一緒に見ていきたいと思えます。

1. 韓国の根

韓国の建国神話で示される建国理念は、弘益人間です。この理念に基づき、韓国は建国以来、人間中心の創造的な価値観を維持してきました。また、数千年の間、自主と独立を守りながら文化を発展してきました。つまり、朝鮮半島の歴史が始まってから高麗時代まで、韓国の人たちは自分の力で周辺国から独立を維持しました。

しかし、朝鮮王朝は、1392年に建国されて以来、儒教的な抑圧と権威主義を支配理念として取り入れながら創造的かつ自主的な人間中心の考え方を排斥しました。つまり、良心と思想の自由を抑圧して無条件的な服従一辺倒の強力な国王中心の集権体制を構築しました。その結果、韓国は目前の安定という錯覚の中で徐々に衰退の道に進みながら日本と胡による屈辱的な侵略を経験したにもかかわらず、新しい改革を拒否した末、ついに20世紀初頭に日本帝国の植民地に転落しました。

2. 朝鮮半島の分断

1945年8月15日、日本の敗戦により、韓国民族は日本のくびきから解放されました。しかし、韓国は、朝鮮時代の儒教と、日本植民地支配の抑圧及び権威主義から目を覚ますことができず、自主的な力量を発揮することに失敗しました。そして、第2次世界大戦の戦勝国であったアメリカとソ連は、朝鮮半島に駐留していた日本軍を武装解除するため、朝鮮半島を一時的に分割し、北緯38度の南側は米軍が、北側はソ連軍が進駐することに合意したのです。ちょうどその時深まりつつあった冷戦構図の下、両大国は軍事的に必要なその一時的な決定を政治的にも固着させました。このような民族分断をもたらした未曾有の悲劇は、強大国の無責任な思惑と韓国民族の覚醒の不充分さ、改革の失敗によるものでした。

3. 分断の結果

このような民族の分断は、南北とも同じくソ連及び米国中心の政治勢力を誕生させ、韓国における国民中心の新しい民主勢力の発展を妨げました。つまり、北朝鮮におきましては前代未聞の残忍非道な金日成三代独裁政権を、そして韓国におきましては李承晩による、無能で腐敗した独裁政権と、反乱軍による独裁政権を誕生させたのです。

これらの政権は、韓国国民の意思と全く関係のない集団でありましたし、ソ連と米国の支持と保護の下民主主義に逆らい、民族分断の原因だった儒教的抑圧と権威主義をさらに深め、反民族的な独自の政権維持に汲々としてしました。すなわち、彼らには、自らの政権を維持することが最大の目標でありましたし、このために統一を政治的なスローガンとして用いただけなのです。国民の自由と人権には、最初から関心がなかったんです。このように、外国に依存する政治勢力によってもたらされた最も多大な被害は、南北ともに、政府の宣伝をそのまま無条件で信じ込ませ、国民全体を精神的な障害者に失墜させた点でしょう。これが、韓国がアジアにおける平和国に進むことを妨げ、また今日における北朝鮮の人権問題の解決を妨害する最も大きな原因の一つです。

分断後の韓国の現実

聖書は、にせ預言者についてはその内実を見て判断するようにと教えています。朝鮮民主主義人民共和国という国号からしても、北朝鮮はその名称は、民主主義で共和国ではありますが、実際には民主主義でも共和国でもないという事実を否定できる人はいないはずで、最も非民主的でありながら、また、権力は国民ではなく銃床からもたらされると信じながら、口では民主主義だと、共和国だと言うのです。北朝鮮の国号は、世紀最大の欺瞞とも言えます。ここで、我々は、判断の基準となるのは、言葉ではなく、行動であるべきだということがわかりました。

こうした点からして、北朝鮮の共産主義集団は、その言葉と行動自体が共産主義そのものであり、国家発展の源である民主主義と平和を拒絶しました。このように、北朝鮮の実体を把握するのは難しくないのです。しかし、問題は韓国です。自由と人権を否定する点

で、韓国も北朝鮮とさほど大きな差がないにもかかわらず、韓国は反共を唱えていたため、それを判断する困難でした。実際の行動からすれば、韓国の反共独裁政権も共産主義と大して変わらなかったからです。

韓国の軍事独裁者であった朴正熙は、その出身も共産党でありましたし、彼の統治自体も口では反共でしたが、実際には共産主義と大きく変わらなかったのです。国号も民主共和国でしたが、その中身は共産党のそれと変わりはありません。一部の米国の学者らは、これらのことに当惑したあまり、権威主義(authoritarianism)と称しましたが、これは言葉遊びに過ぎません。韓国と北朝鮮の間には多少の違いはありましたが、その本質にあるのは共産主義でした。その違いも、西欧と東欧とにおける地理的な違いによるものに過ぎませんでした。つまり、朴正熙が北朝鮮で金日成の座にいたならば、あるいは、金日成が韓国で朴正熙の座にいたならば、朴正熙は北朝鮮での金日成と同じく、金日成は韓国での朴正熙と全く同じ行動をしていたであろうと思います。こうしたわけで、韓国も北朝鮮当局も、民主主義と人権には関心がありませんでした。

北朝鮮の虚と実

北朝鮮はその言葉や行動からしても共産主義そのものでした。共産主義の発生と発展、

失敗の歴史は、共産主義が民主主義の秩序と真実、人間の基本的自由と法治主義の保障される平和的な環境においては、決して発生することも発展することもなく、生存できないことを明らかにしています。つまり共産主義は、日の光で消滅するばい菌に等しいものです。共産党が合法化されている日本と欧米では、共産党は全く脅威ではない厳然たる事実がこれを如実に表しています。



共産党は、暗くて湿めり気のある所、つまり恐怖に包まれた閉鎖的な雰囲気と緊張を必要とするばい菌なのです。そういうわけで、嘘と外部からの脅威、刺激が絶対的に必要です。これは共産主義が生き残るための絶対条件です。この条件が満たされないと、共産党は没落します。自由、真実、人権、平和、対話、分かち合い、協働は、共産党というばい菌を消滅させる日光です。ヘルシンキ条約の成功とドイツの統一は、これを雄弁に物語っています。つまり、平和と人権は、共産主義というばい菌を消滅させる即効薬です。世界のすべての地域で共産主義は消滅しつつありますが、北朝鮮がまだ存在するのは、韓国における、いわゆる反共が、北朝鮮の共産党が絶対的に必要とする緊張と刺激、敵愾心を忠実

に提供してあげてきたためです。今韓国で議論されている北朝鮮人権法は中身がなく、北朝鮮にとって補薬を与える結果になるため、私は、北朝鮮人権法に反対します。これまで韓国の反共は、北朝鮮を弱体化するすべての条件を遮断し、北朝鮮の生存に必要なすべての条件を提供してきた愚かさの極致でした。

韓国の民主化

周辺の世界と世界各地における良心的な人々の力が増すにつれ、1998年、ついに韓国は恥辱的な軍事政権を打倒し、その後、力溢れる自由の波の中で驚くべき発展を成し遂げました。民主化の結果です。勿論、国家最大の問題である南北関係に対する新しい現実的アプローチも試みました。いわゆる南北和解です。これは実際に、北朝鮮崩壊への捷径でもありました。

韓国の民主化勢力の限界

韓国の民主化勢力は、反共独裁を克服する過程において人権を大きく叫びました。そしてついに、執権の機会を得るに至りました。直ちに反共独裁のくびきからも脱出しました。勿論、南北和解という新たな現実的政策をも追求しました。しかし、このような政策は、50年以上継続されてきた盲目的な政策からのコペルニクス的大転換であったために、当然ながらこれらの新しい現実的解決策を拒否する精神障害の反共勢力から大反対にあいました。この過程で、南北和解に邪魔になるような北朝鮮の人権問題からは目をそらしました。人権問題より南北和解が先だという立場だったのです。人権の普遍性と絶対性(Human Rights Supremacy)に背いたのです。

精神障害の過去の反共勢力も、新しい民主勢力も、共に人権を忌避しました。ただ、前者は国家安保を、後者は南北和解を言い訳にただけでした。そして、北朝鮮の人権に興味のない反共的な人権弾圧勢力に盲目的な反共活動の良い機会を与えたのです。これが今日、韓国における北朝鮮

人権活動の中心勢力となりました。北朝鮮の人権は、彼らにとって反共の手段にすぎません。このことは、韓国人が北朝鮮の人権の実態について正しく認識する道を塞いでいる原因の一つです。このような現実を鑑みたと、真の北朝鮮の人権問題について考えてみたいと思います。



北朝鮮の人権：第3の道

韓国は、国家の統一を実現しなければならない民族的課題を抱えています。まず、南北の間における緊張の緩和及び和解を実現することが現実的に考えられる唯一つの第一歩です。だがその一方で、人権は21世紀の時代精神でもあります。これに逆らえば、国際社会における孤立を招くでしょう。しかし、私たちが会って和解しようとする場で、人権を口実に相手を非難することもできません。とはいえ、21世紀、人類の良心である人権を取り上げないわけにはいきません。このような朝鮮半島の現実では、和解と人権は両立できないように見えます。両立し得ない水と火のような関係です。これは、韓国の抱える大きなジレンマとも言えます。

しかし方法はあります。今日、人権蹂躪は国際的な問題になりました。つまり、北朝鮮の人権問題は、今は一つの国際問題なのです。したがって、韓国政府にとっては、北朝鮮の人権問題を国際社会に任せる便利な選択もあります。つまり韓国政府は北朝鮮の人権問題について中立を保つことができます。北朝鮮の人権問題は、政府とは関係がなく、国際社会と連帯している韓国市民の任務です。韓国市民の合法的活動は、政府の所管でも責任でもないということを北朝鮮当局に伝えればいいのです。言い換えれば、韓国政府の役割と市民の役割を分担するということです。政府は南北和解に全力を尽くし、北朝鮮の人権問題は政府の介入なく韓国市民が担っていこう、ということです。これが、韓国が人権と和解とにおけるジレンマを克服する現実的な方法であり、北朝鮮の人権：第3の道です。

人権の真の意味と歴史

人類は、数千年もの間力のある者が弱者を統治する現実の中で生きてきました。正義より力が優先されてきました。力のある統治者の弾圧とこれに抵抗する人々の歴史の連続でした。イギリス初の農民反乱のスローガンは、「エデンの園に、いつからヤンバン（両班）とサンノム（賤民）がいたか」でした。12世紀、韓国の高麗時代に、奴婢であった萬積は「三韓（全国）から奴婢をなくせ」と泣き叫びました。このような人類の良心は、マグナカルタ、先駆者たちによる啓蒙、イギリスの名誉革命、フランス革命、アメリカの独立や奴隷解放などを通じて着実に発展してきました。そしてついに1948年12月10日、世界人権宣言（Universal Declaration of Human Rights）を成し遂げました。

歴史の発展はここで終わっていません。拘束力のない一つの宣言にすぎなかった人権宣言は、いつしか多くの国際人権条約（協約）を生み出し、こうした国際法もまた、いつしかすべての国の国内法の上位に置かれました。（国連憲章第103条—<訳者注>「憲章義務の優先」）このような条約も一部の国々の締約により始まったのですが、その締約国の数が増加し、実質的に尊重された今はその条約への加入の有無に関係なく、すべての国に強制的に適用される（*jus cogens*—<訳者注>強行規範：ユス・コーゲンス）時代になりました。こうしたわけで、人権には時効も管轄権もありません。皆さんは日本人です。しかし、北朝鮮の人権活動をしています。このことは、極めて当然の人類社会の発展です。そして政治、経済、文化または社会的な、いかなる理由であれ、人権弾圧を正当化できないことが世界的にも実現されているのです（Human Rights Supremacy）。

皆さんご存知のとおり、30年前までこの世界には、人権を蹂躪する国家が人権を尊重する民主主義国家よりもはるかに多くありました。ブラジル、アルゼンチン、チリなどの南米地域、ウガンダとナイジェリアなどのアフリカ地域、韓国、中国、インドネシア、ビルマなどのアジア地域がそのような人権を弾圧する独裁国家によって覆われていました。共産主義者たちが暴力を用いて権力を掌握し、軍人たちが世界の至る所で反乱を起こしました。不法逮捕、拷問、殺人や暴行など、反人倫的な犯罪の黒い影が地球をも搔き暗しました。共産主義国家と反共独裁国家とにおける違いはありませんでした。中世以降の暗闇の世界そのものでした。人権を弾圧する集団は、力こそ正義であるという論理を信じていましたし、その絶大な権力を誇示していました。彼らの不義な権力は永遠に続くように見えました。実に暗たんたる気持ちでした。

しかし、人類史上かつてない奇跡がありました。人類の良心を代弁して、名もない世界の市民たちが燎原の火のように世界の至る所で起き上がりました。そして声高らかに人権を叫びました。人類の歴史上初めてのことでした。当時、人権を叫んでいた自由市民たちを含め誰もが、世界の市民たちのこのような人権活動が成功すると信じていませんでした。多くの人々が馬の耳に念仏だとあざ笑いました。名無き市民たちも、自分たちの人権活動が成功するとは思っていませんでした。ただ良心の声に従っただけだったのです。

ところが、今日、世界はどうですか?永遠に続くように見えていた強硬一辺倒の独裁国家のほとんどはいつの間に消滅し、新しい民主主義政府に置き換えられました。誰も信じていなかった驚異の奇跡が静かに実現されたのです。特定の政府や政治勢力、宗教によるものではありませんでした。名無き世界の市民たちの大きな力が成し遂げたものでした。まさにこれが、21世紀を導く力です。皆さんと私が国際社会と連帯すれば、それにより私たちは直ちに21世紀を導いていく新しい力の主役となります。今、皆さんと私がいるこの場所が、新しい力の現場なのです。

国連の北朝鮮人権調査委員会

まさにこの力が、ついに去年3月に国連人権理事会において北朝鮮人権調査委を誕生させたのです。世界各地で国連人権調査委の活動を渴望している中、北朝鮮人権調査委が誕生したのは一つの奇跡とも言えます。票決を通じて大声が行き交うジュネーブの現場で、投票なしの満場一致で採択されたこの決議は、国連が北朝鮮による反人倫的な犯罪をこれ以上座視しないという毅然たる決議の表現でした。世界の自由市民を象徴する、南アフリカ出身のナビネセム・ピレイ (Navanethem Pillay—<訳者注>国連人権高等弁務官) 女史と、いかなる強大国も主導権を行使できない舞台、つまり国連が輝く瞬間でした。

まもなく3人の委員が任命されました。中立的な国家、オーストラリアの最高裁判所の判事出身のマイケル・カービー (Michael D. Kirby)、北朝鮮と長い間友好な





マイケル・カービー委員長（連合ニュース）

委員会は、北朝鮮の人権調査活動が公正に行われるために、北朝鮮が直接、今回の調査活動に加えるよう申し入れました。北朝鮮はこれも拒否しました。罪のない者の潔い態度ではありませんでした。

同調査委の調査委員たちは、2013年8月にソウルで調査活動を開始しました。特に3人の委員たちは多くの証言者と公開または非公開的で直接面談を行いました。調査委の真摯な、かつ、真夏の暑さにもめげずぼう大な調査活動を強行する姿は、私たちを大いに感動させました。

調査委員たちによって行われた公聴会中に、北朝鮮から反応がありました。つまり、今回の人権調査活動は謀略だという決まり文句を繰り返しました。カービー委員長は、それなら証拠を示すべきだとすぐに応手しました。北朝鮮はそれ以上の反応を見せませんでした。同調査委は去る2月に最終報告書を発表し、国連人権理事会は、先月、この報告書を採択しました。

これまで多くの国連人権調査委の前例が示すように、今回の国連の北朝鮮人権調査委の報告書もそれ自体が問題の解決につながるわけではありません。今回の調査委を設置した決議には、調査委が報告書を国連の様々な関連機関に提出することができるという注目に値する条項が含まれていました。今回の調査委の最終報告書は、別途の手続なく、国連総会と安全保障理事会に直接提出することが可能であるために、私たちから注目されています。

国連安全保障理事会を通して、北朝鮮の人権調査委の北朝鮮現地への派遣、北朝鮮の国境地域にて常時北朝鮮の人権状況を監視できる国際機構の設置または国際刑事裁判所への提訴、国際社会の積極的介入などのすべての道が開かれています。ぼう大な検証および分析資料、これまでの国連報告者による数回にわたる一貫した報告書、そして7年もの間連続して採択された国連総会の決議など、今回調査委による報告書は、ロシアと中国の拒否権行使を極めて困難にしています。特に多くの人々は、北朝鮮の金正恩第1書記とそれぞれの保衛部長に対し国際刑事裁判所が逮捕令状を出すことは、その事実だけでも、北朝鮮社会に多大な変化をもたらす導火線となると信じています。

国連の北朝鮮人権調査委の報告書の意義

今まで北朝鮮の人権問題の現実は、「まさか」、「証拠はあるの?」、「信用できるの?」といった段階でした。それで皆さんと私は、北朝鮮の現実を世界に知らせることに注力しました。今回の国連人権報告書は、これらのすべての問題に公式に終止符を打ちました。その報告書は、北朝鮮の人権弾圧の実状、つまりその反人道的犯罪の実状を一つ残らず明らかにしました。「まさにあいつが殺人者だ!」と明らかにしているのです。もう「証拠はあるの?」といった段階ではありません。

人類の良心に対する新たな挑戦

21世紀、今や人類は、あの殺人者をいかにすべきか、という新たな難題に直面しました。国際社会における犠牲者を保護する責任（<訳者訂正>Responsibility to Protect – R2P）は、国際社会による直接的介入の道をも開けました。今回の報告書の発表直後に、北朝鮮と外交関係を断絶した国（<訳者注>ボツワナ共和国）が現れ、また北朝鮮の同盟国であるベトナムの外務長官が北朝鮮に対し人権問題の改善を要求したことがマスコミに報道されています。

それにもかかわらず、今、中国は今回の報告書に反対しています。虚偽の事実に基づいているということがその理由です。しかし、今回の報告書について具体的に反駁はしていません。中国が国連安保理においてまた拒否権を行使する際には、今度こそ大きな対価を払うことになるでしょう。今まで「悪の枢軸」を庇護し、今も脱北者の強制送還を継続している中国に対し強力に抗議すべきです。これが、これからの私たちの活動の新たな指標になるべきです。

仮に中国が拒否権を行使するとしても、日本政府は自国民が犠牲されているので北朝鮮の反人道犯罪を国際刑事裁判所に提訴することができます。北朝鮮の人権問題における過去数年間の日本政府とEUの活動には、真に目覚ましいものがありました。もし、日本政府がEUと共同で北朝鮮の人権問題を国際刑事裁判所に提訴するなら、近い将来に金正恩とその一味に対する逮捕状の発布も期待できるでしょう。このようなことは、北朝鮮の内部においてもかなりの変化をもたらす導火線になるでしょう。

今回の国連の調査報告書は、上記のことの他にも多くのことを可能にします。北朝鮮の人権問題は今まで見えそうで見えないはつきりしない小道でした。しかし今は、坦々たる大路です。北朝鮮人権活動はこれからです。

新しい選択——これからの方向

それでは、北朝鮮の人権問題の解決にはどのような方法があるのでしょうか?

1. 軍事介入

軍事介入は、即刻解決を可能にするでしょう。北朝鮮の軍事力に比べ、卓越した軍事力をもつ韓国が世界最大の強国の米国と連合して軍事的に北朝鮮を解放させる方法が最も効果的な方法であるかもしれません。しかし、この場合、北朝鮮と中国、ロシアと

の相互安全防衛条約は、中国とロシアによる介入の道をも開いておいています。したがって軍事的解決の方法は非現実的です。

2. 韓国市民と政府の活動

先ず、韓国国民が果たすべき役割があります。同じことが日本で起きたとしたら、日本の国民はこの問題を既に解決したでしょう。しかし、既に上で説明したような理由により、韓国の反共勢力は、実際に北朝鮮を守ってくれているだけでなく、韓国市民たちの効果的な北朝鮮人権活動をも邪魔しています。韓国社会の覚醒と活動を期待できないというのが今日の心苦しい現実です。

3. 国際社会との連帯

北朝鮮の人権問題は、国際問題であり、極東地域に限られた問題ではありません。したがって、国際社会と連帯することによりこの問題を解決することができます。このものすごい力に気づくことのできる人は、「目のある者」と「耳のある者」だけなのです。この人たちだけが、見ることも聞くこともできます。大変恥ずかしく、かつ不幸なことに、韓国にはこのような目と耳を持つ者がほとんどいません。希望は、人類の良心である国際社会なのです。これから、国際的活動をさらに強化しなければなりません。

国際社会の関心がより広範になるために、北朝鮮による犯罪の実状を世界に知らせる活動は続けられるべきです。しかし、これからは国際社会に積極的な介入を促す活動がもっと重要でしょう。国際会議と集会およびデモ活動を通じて、国際社会の積極的な行動を訴えなければならぬのです。

その最初の段階として、世界の至る所で大規模な反中国キャンペーンを組織し、主導することが、一つの案として挙げられます。各国の中国大使館の前で大規模なデモを行うことは、中国に大変な重圧を与えるでしょう。そのための資料研究および作成なども重要な課題です。〔考えられる〕いくつかの試み（試作品）についてご紹介したいと思います。

中国は張り子の虎である

これから私たちは北朝鮮の犯罪を庇護する勢力である中国に対し、より強力な抗議を展開し直さなければなりません。世界各国の中国大使館の前で、大規模な抗議デモは中国に大きな打撃となるでしょう。大国である中国が、〔中国に比べて〕極めて小さい北朝鮮による犯罪の下手人の役割をしている現実を世界に知らさなければなりません。北朝鮮においては、単に中国人の子という理由だけで多くの幼児を殺害または強制墮胎をしてきました。中国は、このような恥ずべき野蛮行為を黙認していることを世界に知らせなければなりません。中国政府の誤りと野蛮行為を中国の市民に知らせなければなりません。日本や韓国を訪問する多くの中国人観光客に対する広報活動も大きな貢献になるでしょう。中国は弱点の多い国です。弱点が多い人ほど自尊心（プライド）が重要となってきます。私たちは、中国のその自尊心を攻撃しなければなりません。

果して中国は**どんな国**なのでしょうか？

一つの非政治的な心身鍛練団体である法輪功が脅威となる国は、世界でも中国以外にはありません。法輪功が脅威になるほど、中国は弱い国なのです。

中国の経済力も、表側は派手に見えますが見掛け倒しです。騙されないで下さい。共産党主導の国家資本主義中国は、内部経済が欠けている国です。日本、欧州、米国と韓国が製品を買わなければ存立することができません。つまり中国は、外部世界の人質に等しいです。それだけでなく、中国の各階層の間には相当な緊張が生じています。中国は、高付加価値産業へ移ろうとしていますが、米国、ドイツ、日本のような錚々たる国に付いていくことはできないでしょう。というのも、経済発展の原動力である民主主義勢力を抹殺したからです。それで今、中国共産党の三大組織の党員が潮が引くように抜けていっています。その数は、既に1億をはるかに超えています。民主主義は共産党を消滅させます。そのため、民主主義を行うことができません。こうなのはどうやって中国経済がうまく発展できるのでしょうか？

中国は大変大きな国です。確かにそうです。しかし、中国は10カ国余りに囲まれている不安定な国でもあります。また、中国だけが大きい国ではありません。ロシアも大きな国です。インドも大きな国です。ヨーロッパにも大きくて力のある国が多いです。米国も大きくて強い国です。日本もすごい力のある国です。韓国も相当な軍事力を保有しています。中国はアジアの弱小国であるベトナムにも最近敗北した国です。中国は張り子の虎です。恐れる必要はありません。

強制送還

北朝鮮の住民たちが北朝鮮当局の弾圧と飢えから逃れるために中国へ脱出しています。これらのことは、すべての側面からして難民の要件を満たしており、難民として国際社会の保護を受ける資格を有しています。〔しかしながら〕中国は、これらの人々を強制的に北朝鮮に送還しています。これは、21世紀、人類の良心に対する挑発であり、野蛮行為です。

国際社会における強制送還の禁止の**根拠と現実**

世界人権宣言はかつてから、「すべての人は、自国その他いずれの国をも立ち去り、及び自国に帰る権利を有する」、「…迫害を免れるため、他国に避難することを求め、かつ避難する権利を有する」と宣言していました。第13条と第14条です。

これが今日すべての人権条約において強制送還を禁止している根拠です。本国に送還されたとき処罰や虐待はおろか、ほんの少しの不利益



「エレノア・ルーズベルトと世界人権宣言」
(国連人権高等弁務官事務所 HP)

を被るおそれがあれば、それだけでも強制送還はできないというのが 21 世紀の人類社会の確固たる決意です。3 千万人を越える難民が世界の至る所で国際社会の保護を受けているのが、今日の現実です。過去 60 年間、この強制送還禁止の原則に反対したり、守らなかった国はありませんでした。ただ中国だけが、初めてこれを拒否しているのです。このように、脱北同胞に対する強制送還は、韓国社会で考えられているように、「中国で中国の国内法を違反しているが、それについてはどうすべきか？」という問題ではないのです。私たちは、これに強力に抗議できる正当な権利と理由があります。

また、この強制送還の禁止条項は、難民であるか否かとは関係がありません。〔この条項は、〕人権に関連する、すべての国際条約の中心となる規定です。しかし、中国政府は中国に脱出してきた北朝鮮住民は難民ではないがゆえに強制的に送還するという事です。犬も笑うこと〔ばかばかしいこと〕ではありませんか？空言でも、脱北同胞が北朝鮮に強制送還されても少しの不利益をも被ることはないと言うべきでしょう。中国はこんなにも無知な国です。

それにもかかわらず韓国には、このようなことを中国に対し堂々と抗議する外交官、政治家が一人もいませんでしたし、今もない、ということが痛嘆すべき私たちの現住所なのです。今まで、そして、今この瞬間にも北朝鮮を脱出した住民たちの悲劇、苛酷極まりない虐待を受けている人間の悲劇が天を突くほどの勢いで続いているが、我が国韓国は、一度も、中国に対して正々堂々と抗議したことがありません。どれだけ恥ずべきことなのでしょう！

北朝鮮の人権活動は今からだ！

—金尚憲氏講演報告—

副代表 小川晴久 

NO FENCE 第六回定期総会の第二部として、今年は韓国から国際的な北朝鮮人権活動家の金尚憲さん（81 歳）をお招きして、二時間半に及ぶ型破りに長い講演をお願いした。会場であった“人権ライブラリー”の集会室を一杯にする 60 名近い人々が各界から集って下さった。長文の講演原稿は 10 日前にいただいていたのであるが、事務局は COI 報告の「政治犯収容所」の項の翻訳に追われていて、原稿の翻訳は直前になってしまった（機械翻訳を是正したもので、最後の中国論と脱北者の強制送還問題を Cut したもの）。これを参加者には当日配布したが、後日わかったことは好評であった。私は当日メモした講演内容を基に、講演原稿も参照して、講演の後半の人権の歴史、COI 報告評価、これからは中国が相手であると言う中国論の三つを以下に紹介し、私の感想も付すことにしたい。先ず話の要旨を紹介する。

一、人権は大きく成長した

今や人権が一つの大きな力になったが、近くは 1948 年制定の世界人権宣言からはじまる。世界人権宣言は「当初は単なる宣言でしかなかった。」拘束力を持たなかった。「そ

れが足が生え、手が出て段々大きくなった。」 国連憲章第 103 条で UN (国連) の人権法が「最優先される」ことが規定され、「人権法は段々大きく強くなっている。今や国際的な拘束力を持つようになってきている。」 「人権が発達するにつれて、主権が力を失い始めた。」 「人権問題には時効がない。」「しかし大部分の人はこのことが見えない。」

1980 年代の中頃まで世界は独裁国が多かった。しかし一つの奇跡が起きた。名もない市民たちが声を挙げた。今や独裁国がほとんど亡くなっている、北朝鮮を除いて。「名もない市民の声」こそ人権の力である。「国連の中で今やどの国でもわがままができない。」

二、COI 報告書の意義

これまでの北朝鮮人権問題の現実は、「まさか」「証拠はあるのか」「どのように信じることができるか」という段階であった。私たちは北朝鮮の現実を世界に知らせることに力を注いできた。今回の国連人権報告書はこれらすべての問題に公式的に終止符を打った。この報告書は北朝鮮の人権弾圧の実像即ち反人道犯罪の実像を一つ一つ明らかにし、「まさにあの男が殺人者だ」と確認している。今や証拠はあるのかという段階は終わった。一つだけ取り上げていないのは生体実験で、他の全ては明らかにされた。今からやるべきことは一杯ある。国際刑事裁判所に提訴する道が一つ。中国が安保理で拒否権を行使したとき、中国は国際的に大きな対価を支払うことになる。たとえ中国が拒否権を行使したとしても、日本政府は自国民が犠牲となっているのだから、国際刑事裁判所に提訴することができる。EU と共同で提訴できたらなおいい。「近い将来金正恩とその一党に逮捕礼状が出ることを期待できよう。」「それが実現すると、北朝鮮内部で大きな変化を引き起こす導火線となる。」 国際社会は北朝鮮の民衆を人道犯罪から守る責任（保護する責任、R2P, Responsibility to Protect）を行使しなければならない。それに立ちはだかるのは中国である。「これからは中国を相手にしなければならない。」

三、中国は張子（はりこ）の虎、中国は阿 Q

「今や私たちは北朝鮮の犯罪を弥縫（びほう）する国中国に対し、より強力な抗議を新しく展開しなければならない。世界各国は中国大使館の前で大規模な抗議行動を展開したら、中国には大きな打撃となるであろう。大国中国が極めて小さい北朝鮮による犯罪の擁護・下手人の役割をしている現実を世界に広報しなければならない。」

北朝鮮では単に中国の子供という理由だけで、おおくの嬰兒を殺害又は強制墮胎してきた。中国がこのような野蛮行為を黙認している事実を世界に知らせなければならない。中国政府の過ちと野蛮行為を中国国民に知らせなければならない。

中国は弱点の多い国だ。弱点の多い者こそ自尊心が重要である（阿 Q がそれだ）。私たちはこの自尊心を攻撃しなければならない。力の強いものに従うのが阿 Q である。

共産党の指導による国家資本主義の中国は、内部経済のない国だ。日本、ヨーロッパ、米国、韓国が製品を買わなければ、存在できない。高付加価値の産業に移行しようとしているが、米国、ドイツ、日本のような錚々（そうそう）たる国についていくことはできな

い。経済発展の原動力である民主主義の勢力を抹殺したためだ。だから今中国共産党の三大組織の党员たちが引き潮の如く抜けて言っている。その数は一億を超えている。民主主義を実践すれば、共産党は消滅する。だから民主主義を実践できない。これでどうして中国経済は発展するだろうか。

中国はとても大きな国だ。しかし中国は十余か国に囲まれている不安な国だ。それだけでなく、中国だけが大国なのではない。ロシアもインドも大国だ。ヨーロッパにも大きくて力の強い国が多い。米国も大きく、力の強い国だ。日本も大きな力を持っている。韓国も軍事力を所有している。中国は張り子の虎だ。恐れる必要はない。

四、 中国の犯罪——脱北者の強制送還

北朝鮮住民が北朝鮮当局の弾圧と飢えを逃れて中国に脱出している。彼らはあらゆる面で難民の条件を持っていて、難民として国際社会の保護を受ける資格を持っている。中国は彼らを北朝鮮に強制的に送還している。これは 21 世紀の人類の良心に対する挑発であり、野蛮行為である。

世界人権宣言は早くも「全ての人は誰も自国も含めてそのどこの国からも出国する権利があり、又自国に再び帰る権利がある。」 「迫害を避けて別な国に行き、避難所を探して、それを受ける権利を有する。」と述べている。第 13 条と第 14 条である。これが今日あらゆる人権関係協約が強制送還を禁止している根拠である。難民であるか否かに関係なく、強制送還禁止は人権関係国際協約の中心的な規定である。これを理解していない中国は、犬にも笑われる無学・無知な国である。

【私の感想】 私は世界人権宣言と瓜二つの人権条項溢れる現日本国憲法の下で教育を受け、今日まで来た一人である。この 20 年間北朝鮮の人権問題に取り組む中で人権の価値を学んできた。今や世界人権宣言（1948 年）が人類が築き上げた思想・文化遺産の中で最高のものと言う確信を持つ所まで来た。その私が今回の金尚憲さんの講演から学んだ第一は人権の思想である。

1948 年制定の世界人権宣言が単なる宣言に過ぎなかったのが、足が生え、手が出来て、今や堂々たる存在になったという指摘にである。特に難民条約と中国の脱北者の強制送還に関連して、世界人権宣言第 13 条と第 14 条に目を開かされた。第 13 条と第 14 条は次の通りである。

- 第 13 条 (1) すべて人は、各国の境界内において自由に移転及び居住する権利を有する。
- (2) すべて人は、自国その他いずれの国をも立ち去り、及び自国に帰る権利を有する。
- 第 14 条 (1) すべて人は、迫害を免れるため、他国に避難することを求め、かつ、避難する権利を有する。
- (2) この権利は、もっぱら非政治的犯罪又は国際連合の目的及び原則に反する行為を原因とする訴追の場合には、援用することができない。

第13条の(2)項は知っていた。約50年前日本から北朝鮮に在日の人たちが帰国したのは、この第2項によって実現したからである。しかし(1)項は知らなかった。北朝鮮国内では移動の自由がないことは、今回のCOI報告書で詳しく立証されているが、世界人権宣言第13条第1項で明々白々と宣言されていることを、北朝鮮当局が真っ向から踏みじっていることを、恥ずかしいことに今回初めて知るに至った。

こういう条項を朝鮮語に訳し、北朝鮮内の人々に知らせたら、人権とはどういう者が始めて北の人々に知らせることが出来る。

注目すべきは、金尚憲さんが、この第13条と第14条が、難民であるか否かに関係なく、国際的人権法の中心に位置する条項と言われたことである。そしてそれを理解できていない中国政府(中国共産党幹部)を無学・無知と断定したことである。私は人権についてしっかり学ぶ必要があることを痛感させられた。

二つ目に学ばされたのは、氏の中国観である。中国が十余か国に囲まれているという指摘がその一つである。私は世界地図を開き、数えてみた。北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフ、キルギス、タジック、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ビルマ、ラオス、ヴェトナム、計14カ国である。改めて気づいたことは、中国が余りに西に領土を持ち過ぎていることだ。将来、新疆ウイグル自治区、チベット自治区はウイグル人やチベット人のものになるであろう。今は弱小に見えても、将来ロシアやインドを除いた諸民族がそれぞれ力をつけていけば、自治区も分離独立していけば、中国は少しはスリムになるであろう。漢民族は確かに大きいですが、日本、南北朝鮮を含め周辺の国々が、中国と対等平等な民族観、国家観を身に着け、実現していけば、中国は手ごわい国ではなくなる。中華意識は周辺の我々の意識の中から払拭していかねばならぬ。中国が人権の意識を身に着けていけば、中国は怖い存在ではなくなる。そのためにも脱北者の強制送還が、国際人権法の根幹に真っ向から違反している事実をしっかりとつかみ、中国人にその事を知らせていかねばならぬ。私は中国研究者の一人であるが、金尚憲さんからとても大事な中国観を教えていただいた。感謝である。大感謝である。魯迅の『阿Q正伝』まで引き出されたのには脱帽した。

Dear No Fence

 **Markus Bell**

世話人 木村亮訳

My name is Markus Bell. I am a PhD candidate, researcher and photographer, based in Canberra Australia. I am in Japan for one year while I carry out research on the lives and experiences of Zainichi returnees from North Korea.

マーカス・ベルと申します。博士論文提出資格をもつ研究者であり、写真家でもあります。オーストラリアのキャンベラが私の本拠地です。北朝鮮から日本へ帰国した在日たちの人生と経験について研究を進めるなかで、ここ1年間は日本に暮らしています。

Through meeting activists and academics involved in the field, here in Japan, I was lucky enough to learn of the meeting that took place on Saturday 12th April, in Tokyo. I went along by myself and listened to members of *No Fence* discuss their work over the last year, which included a number of contributions to raise awareness of the human rights crisis currently unfolding in Northeast China and North Korea.

日本で、この分野の活動家や研究者にお会いしているうちに、すごくラッキーなことに、4月12日(土)に東京で開かれるという集会のことを知りました。私はひとりで出かけて行き、NO FENCE 会員の方々が昨年度の活動について議論しているのを聞きました。これらの活動には、中国東北部と北朝鮮で進行している人権危機への注意を喚起する、いくつかの貢献が含まれていました。

These issues have always been close to my heart and I have written extensively on them in the past (see the links below). It was both impressive and inspiring to see the active and impassioned community here in Japan dedicated to improving the lives of thousands of individuals in Northeast China and those still in North Korea. Of course, the ongoing existence of labour camps in North Korea is a critical issue on the human rights radar at the moment, following the publication of the UNHCR report, and it was this that was addressed extensively by Sanghun Kim, Chairman of the Database Centre for North Korean Human Rights and keynote speaker at the *No Fence* meeting.

これらの問題は私がつねづね重要だと思っていることであり、以前、私も幅広く論じたことがあります(文末のリンク先をご参照ください)。ここ日本の、活動的で情熱的な団体が、中国東北部や北朝鮮に今もいる何千もの人々の生活を改善するために献身しているのを見て、私は強い印象を受け、鼓舞される思いがしました。言うまでもなく、北朝鮮にまだ強制収容所が存在していることは、国連人権調査委員会の報告書が公表されてのち、目下の人権問題の焦点となる決定的な問題です。集会の基調講演者、北朝鮮人権情報データベースセンター理事長の金尚憲さんも、そのことを広範にわたって演説されました。

Following the meeting, I was invited to join members of the *No Fence* group for dinner and further discussion of their activities and goals. Over Chinese food I had the privilege to discuss issues of human rights with North Korean defector K and *No Fence* Ms. Eunwon Yi, editor of the *No Fence* site.

集会のあと、私はNO FENCE 会員の方々と夕食にお誘いいただき、みなさんの活動と目標をめぐる議論の続きに加えてもらいました。中華料理をいただきながら、脱北者のKさん、NO FENCE 編集担当の李恩元さんと、人権問題について意見を交わすという、特典にあずかることができました。

I would like to sincerely thank all the members of *No Fence* for their hospitality and hard work contributing to the end of labour camps and the improvement of human rights in North Korea. Well done and keep up the wonderful work!

NO FENCE のすべての会員に、心から感謝を申し上げます。みなさんのお心づかいに対して、そして、北朝鮮の強制収容所を終わらせ人権を改善するのに寄与している、困難なお仕事に対して。おみごと！素晴らしいお仕事を今後もぜひ！

Please feel free to check out the following links to learn more about my own work in this field:

私のこの分野での仕事について、もっとお知りになりたい方は、下記のリンク先をお気軽にチェックしてください。

<http://markusbell.weebly.com/>

http://fpif.org/empire_capitalism_and_human_trafficking_in_northeast_asia/

http://fpif.org/make_migrants_not_war_in_north_korea/

Sincerely,

Markus Bell

それではまた。

マーカス・ベル

PhD candidate at the Australian National University

オーストラリア国立大学 博士論文提出資格者



📖 総会后、近所の中華料理のお店で
(撮影・宋事務局長)

本会報はノーフェンスの
ホームページでも閲覧できます。
<http://nofence.jp/>

新世話人からのごあいさつ

世話人 木村亮 



3月より世話人になった木村亮（きむら りょう）です。ふだんは、出版社で編集者として働いています。東京都杉並区に住んでいます。今年30歳になります。

かねてから北朝鮮の人権問題については、身体的・精神的自由の欠如、飢餓問題、拉致問題、難民問題など、ひどい状況だと心を痛めていました。しかし、一昨年に刊行された小川晴久副代表の著書を読んで初めて、強制収容所にはそれらすべての問題が集約されていること、また強制収容所は北朝鮮の人権抑圧体制を最終的に支える手段であること、その他いくつかの理由から、強制収容所問題こそが北朝鮮人権問題の核心であるということに気づきました。その後、小川先生から種々の教えを受けたり、NO FENCEの集会に出入りしたりしているうちに、世話人をつとめる機会を与えられた次第です。



北朝鮮問題にとりくんでおられる方々の考えは多様ですが、NO FENCEで出会った方々は皆、国境や民族のちがいを越えて人権を守り広げたいという思いをもっておられ、そのことに共感しております。何よりも収容者たち（潜在的な収容者も含めて）の生命を守ることが喫緊の課題ですが、これを果たさないかぎり、日本と朝鮮の人々のあいだに全面的な和解・友好・平和を築くことも展望しがたいように思います。戦前以来の日本の、朝鮮の人々に対するさまざまな行為を本当に反省するのなら、強制収容所で苦しみながら死んでいく北朝鮮の罪なき人々を、座視してはられないはずだと思います。

映画「北朝鮮強制収容所に生まれて」の日本公開や、国連北朝鮮人権調査委員会の調査報告などにより、日本でも北朝鮮強制収容所への関心が高まっているのを感じます。強制収容所の廃絶は簡単な課題ではありませんが、このような反人間的な代物がいつまでも続くはずがないという直感もあります。一刻も早く廃絶するために、私にできることは少ないですが、力を尽くしたいと思います。

【報道記事紹介】「国際社会と共に北朝鮮の包囲を」

『東京新聞』2014年4月16日付

国際人権活動家

金尚憲氏



国連人権理事会が三月に採択した決議で北朝鮮の人権侵害に対する国際社会の注目が集まる中、約二十年にわたり脱北者の支援や北朝鮮の人権侵害を告発する活動を続ける韓国の人権活動家がいる。NGO「北朝鮮人権情報センター(NKDB)」理事長の金尚憲さん(63)だ。独裁国家・北朝鮮に対するとらえ方や、今後の活動方針について聞いた。

◇ (城内康伸)

◇ 「どつとして北朝鮮の人権活動を始めたのか。」

「十八年勤務した世界食糧計画(WFP)を退職後の一九九六年、(北朝鮮の強制収容所解体を目指して運動する)小川晴久東大名誉教授の北朝鮮の人権侵害に関する講演を韓国で聴い

脱北者支援、人権侵害の告発



キム・サンホン 1932年、現在は北朝鮮の咸興(ハムフン)で生まれる。57年に韓国の延世大卒業。在韓英国大使館や米国の援助団体での勤務を経て76年から国連世界食糧計画で食糧支援事業に従事。95年から北朝鮮の人権活動を開始。2003年に米誌「タイム」で「アジアの英雄」に選ばれる。

国際社会と共に 北朝鮮の包囲を

た。大変な衝撃を受け、それまで関心のなかった自分を恥じ、人権弾圧に苦しむ人々を助けなければ、と考えた。

「それから東南アジアの脱北ルートを開拓するなどし、これまでに約一千人の脱北者を支援した。支援活動の中で、多くの北朝鮮同胞と面談し、北朝鮮の人権侵害の実態を知るようになった」

「二〇〇四年に人権侵害に関する証言の収集と公開を行うN

KDBを設立した理由は、

「人権問題解決には、北朝鮮の実相を国際社会に知らせることが第一歩だと確信した。それは北朝鮮への圧力につながる。これまでに一万件を超える証言資料を集めて公表してきた。活動に当たって堅持してきたのは、資料の客観性と公正性。北朝鮮当局も一度も反駁したことがない」

「北朝鮮体制をどのようにみるか？」

「北朝鮮に限らず共産主義国家・独裁国家に共通するのは、他国との摩擦や緊張、危機状態を醸成して体制存続を図る点だ。それによって国内を引き締め、住民の不満や疑問の発生を抑え込む。韓国は長らく北朝鮮政策において安保だけを叫んできた。これは北朝鮮に有利な条件となり、その結果、北朝鮮はこれまで承らえてきた」

「韓国には九〇年代末に民主政権が生まれて融和政策にかじを切ったが、和解を重視するあまり、人権問題を無視する態度を取った。大切なのは、人権侵

害の証拠をそろえて国際社会の力を借りながら、人権、言論の自由、民主主義を北朝鮮に求めたかの国を包囲していくことだ」

「今後どのように活動を展開する方針か。」

「国連調査委員会が(北朝鮮の人権侵害を厳しく非難する)報告書を出し、人権侵害は真実として国際社会に認知された。当面は国連安全保障理事会が、人権侵害について国際刑事裁判所(ICC)に付託できる環境づくりを力を入れていく考え。北朝鮮の人権活動はこれからが正念場だ」



9日に開かれた北朝鮮の国会に当たる最高人民会議に出席した、金正恩(キム・ジョンウン)第1書記。人道に対する罪への責任を問う声がある。AP

北朝鮮の人権侵害に関する最終報告書 国連人権理事会が昨年3月に設置を決めた国連調査委員会が今年2月に公表。拉致や公開処刑、拷問など、北朝鮮が国家最高レベルによる「人道に対する罪」を犯したと指摘する。国連安全保障理事会に対し、国際刑事裁判所への付託や国連特別法廷の設置を勧告。国連人権理事会は3月下旬、人権侵害に関与した個人の責任追及のため「適切な国際刑事司法メカニズム」への付託や制裁を検討するよう安保理に勧告した。

【報道記事紹介】「北、閉鎖収容所再開か」

『東京新聞』2014年4月19日付

北、閉鎖収容所再開か

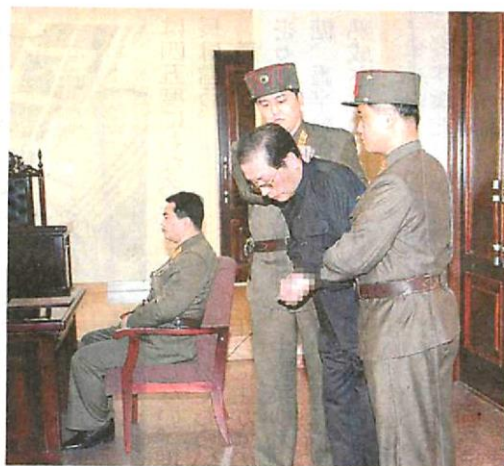
張氏肅清後の政治犯送る？

北朝鮮中部の閉鎖された旧政治犯収容所「18号管理所」の跡地に住む炭鉱労働者ら1万人を超える住民を、北朝鮮当局が二月から別の地域に強制移住させる作業を進めていることが十八日、日本のNGO「北朝鮮強制収容所をなくすアクションの会」による調査で分かった。北朝鮮事情に詳しい複数の消息筋も同様の情報を把握しており、新たな政治犯を収容するための管理所再開に向けた準備とみられている。

(城内康伸)



住民1万人 強制移住



昨年12月12日、軍事法廷に引き出される張成沢氏(右から二丁目)。死刑判決を受け、直後に執行された。朝鮮中央通信/AFP・時事(一部画像処理)

国連人権理事会は三月下旬、政治犯収容所など北朝鮮の人権侵害を厳しく非難する決議案を採択した。強制移住の動きは国際社会の批判に逆らうものだ。

韓国統一省のシンクタンク・統一研究院の報告書によれば、18号管理所は平安南道

北倉地域に一九八三年、東西に流れる大同江をはさんで北部に位置する价川の十四号管理所と分離して開設した。有数の石炭鉱と接しており、八〇年代には数万人規模の政治犯と家族を収容。収容者は石炭採掘などに従事していた。

八五年から収容規模は徐々に縮小され、二〇〇六年に閉鎖した。18号管理所の被収容者は14号管理所に移され、18号管理所跡地では、政治犯の身分を解除された住民がそのまま住み続け、採掘作業などを続けていた。

強制移住の動きは、18号管理所の元収容者で親族が跡地に現住する脱北者の証言で判明した。跡地の住民は14号管理所の西側に位置する東林里地域に移されているとい

い、解体された18号管理所の監視施設を再設置する作業も行われている。

北朝鮮では昨年十二月に金正恩第一書記の叔父で党行政部長だった張成沢氏がクーデターを画策したとして処刑された。秘密警察の国家安全保衛部が、張氏に連なる人物に対する大規模な調査を進めている。強制移住に関して、消息筋は「張氏肅清後に拘束した大量の政治犯を送り込む目的だろう」と指摘する。

お願い

私たち「NO FENCE」は、北朝鮮の強制収容所をなくすためのアクションを展開するにあたって、みなさまからの声を常にお待ちしています。

- ・北朝鮮強制収容所体験者の本を読んで感じたこと
- ・「NO FENCE」の活動についての提言
- ・映画『北朝鮮強制収容所に生まれて』を観た感想
- ・北朝鮮の強制収容所について日頃から思っていたことなど…

みなさまの心のこもった一言が北朝鮮の強制収容所をなくす原動力となります。

お問い合わせ(編集者) yi_ew@hotmail.com